

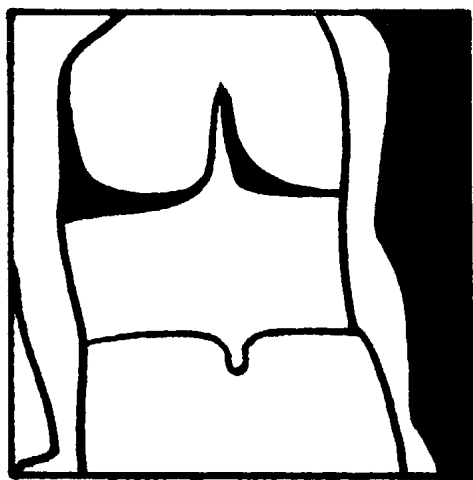
彼の初恋

高橋三千綱



彼の初恋

高橋三千綱



彼の初恋

昭和五十二年二月二十四日 第一刷発行
昭和五十二年五月 四日 第三刷発行

著 者 高橋三千綱

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二二二／郵便番号一三二
電話東京〇三九四五―二三(大代表)／振替東京八一三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社



落丁本・乱丁本はお取り替えます

© Michitsuna Takahashi 1977, Printed in Japan

●高橋三千綱

昭和二十三年生まれ。サン
フランシスコ州立大中退。
第十七回群像新人賞受賞。
著書『退屈しのぎ』

目次

親父の年頃	5
彼の初恋	131
光る丘	183
野生	207
雷魚	237

装帧 大沢昌助

高橋三千綱作品集

彼の初恋

親父の年頃

雲が眼下を流れている。陽光をたらふく吸い込み、眩しく輝かせた背中をだるそうに揺り動かして、のたりのたりと後方に泳いでいく。雲が切れると海が顔を出す。青く光って、朗らかな表情をしている。周一は座席に軀を沈める。

機体が少し傾く。

眼を閉じていた周一は再び顔を窓に寄せてみる。不意に青黒く煙った丘陵が視界にとび込んできた。なだらかに、そしてひっそりと息づく稜線を見て、日本だなと思う。長つばそい日本地図が頭に浮かんでくる。それが狭められて東京湾付近に焦点が集まり始める。

飛行機は急速度で陸に突っ込んでいく。周一は頭を戻して、いそいで唾液を製造し始める。気圧の変化で耳が悲鳴をあげている。羽田に着くまでに直るかな、思いながらしきりに唾を喉の奥に送り込む。ためしに思いきり口を開いて欠伸^{あくび}をしてみる。栓が抜けたように耳の中の風

通しがよくなる。顎を引く。

丸い二重窓を通して展望台からこちらを見下している人々が見える。はじめに妹の笑っている顔が眼に入った。赤いコートが反射して顔を明るく照らしている。妹を挟んで母親と細面の青年が立っている。母親の着ている和服は、心なし震えているように見える。その他に叔父や昔のガールフレンドの顔もある。高校、大学を通してつき合っていた友人もいる。随分来ているなあ、周一は首を戻して溜息をつく。アナウンスがあつて乗客たちは座席から立ち上がりだした。定員の五分の一ほどしか客が乗っていなかったのも、出口が混み合う心配もなく、みんなのんびりと荷物をまとめている。周一は両耳に指を突っ込み、しばらく押さえていてから勢いよく放した。日本語の世界だな、胸の内で呟いて下唇を嚙んでみる。やがて、ゆっくりと席を立つ。

タラップを降りだすと、横合いから冷たい風が頬に斬りつけてきた。肩を竦ませて手をあててみる。湿っぽいものが頬に残っている。風が冷たいぶんだけ空気が澄んでいる。上を向くと、展望台の手摺に掴まって横に行儀よく一列に並んだ迎えの者たちが、周一を見て笑顔をつくっていた。妹が伸び上がった腕を振っている。周一も片手をあげて笑いかけようとしてみたが、寒さに負けて頬は凍ったようにつっぱった。

荷物を受け取って税関を通る。東南アジア方面から帰ってきた団体客が、前後に並んで声高に喋りあっている。地方訛りも混じる。よく聞いていると心の動きまで読みとれそうな気がし

てくる。今話しかけても、彼等は何の違和感も覚えずに受け答えをしてくれるだろうと思つてみる。そう考えている自分に気付いて、周一は初めて日本に來たアメリカの留学生みたいな印象を自分に対して抱いた。

すぐ前にいる初老の男は、隣の列に並んでいる人に向かつて喋りまくっている。出っ歯に煙草の脂が貼りついている。皮膚が埃で固められたように乾いている。上下する顎の振動によつて、頬が剝げ落ちてしまうのではないかとさえ危ぶまれる。ふと父親の顔が周一の脳裏に浮かぶ。息もつかずに喋る男の様子は、調子に乗ったときに見せる父親の雰囲気とよく似ていた。冷気に覆い包まれたような懐しさが周一の心に宿る。不意に男は横を向いた。正面から周一の視線をとらえた。眼が充血している。なんだか汚らしい。男は照れ笑いを見せた。あわてて唇を手の甲で拭いた。再び話し相手の方に向き直る。年とった横顔が活動を始めだす。そこで始めて、周一は、にっと笑う。

荷物を下げて税関を出ると、家族の者たちが人ごみの中から近付いてきた。母親が「よくまあ」とだけいって、あとは眼の下に皺を寄せて笑みをつくり、周一の荷物にそそくさと手をかけた。周一はその手をそつと払って、年とったなといった。二年半前に羽田に見送りに來たとき比べて、母親の顔に刻まれた皺は深くなっている。年をとると人間は何故か皺ができた。顔がやつれて人生の苦勞が表面に現われてくる。周一はそう思いながら母親の顔を見ている。

陽子が一人の背の高い眉毛の濃い青年の手をとつて母親の後から現われてきた。妹の顔は細

っそりしてきて、以前には感じられなかった柔かみが滲んできている。女になった、うまいもんだ、周一は舌を鳴らす。

「おにいちゃん、この人がこの間いった植村さん。ねえ、カッコイイでしょ」

青年は頭を掻いている。周一がやあとといって手を差し出すと、彼は陽子から離れて日焼けした腕を伸してきた。周一が手を強く握ると、彼の指は微かなとまどいをみせた。

背後に以前付き合っていたガールフレンドが二人、きれいに化粧しておとなしく佇んでいる。友人がしきりに首を横に倒して合図を送ってくる。叔父もいる。傍にいる女性が眩しそうな眼付きで周一を見ている。その人たちに向かって周一はやあとという。みんなはいっせいに頷き返した。

「とりあえず、その辺でコーヒーでも飲むか」

そういつて周一は先に歩きかけた。陽子は一瞬きょとした顔をしてから、あわてて眼をしばたいた。

「おとうさんがいるのよ。私たちが二十八番ゲートに飛行機が着くからっていつていたのに、いやこっちだ、こっちが正しいとかいって、一人で十七番ゲートの展望台に頑張っていたのよ」

「えっ？」

「もう戻ってくると思うわ。ほんとにドジなんだから」

周一は眼を丸くした。

「親父はまだ生きているのか」

今度は陽子が見開いた。

「いやだあ、あたり前じゃない」

吹き出した。周一は顔を赤く染めて笑っている陽子を見ながら、眼前に黒い幕がするすると下がってくる映像を思い描いていた。おぼろげながらに見えていた一本道の先にある景色が、再び父親の影に遮られ、いちどきに闇の中に姿を消したような気がした。溜息が出る。

「お医者さんも、もう大分良くなったといっているのよ。家にじっとしているより、かえって散歩などをして少し軀を動かした方がいいんですって」

「おとうさんも大分弱ってね。あれで結構お前に会えるのを楽しみにしているんだよ」

母親が遠慮がちに声を落している。周一は生返事をして頷く。空港ビル内のざわめきが冷気の中に溶け込んで、静まり返った劇場の中にいる錯覚すら起こる。

「立ち直ったわけか。いやあ、おれはてっきり、もう……」

再び吐息をつく。すぐに笑い出した。喉がしゃくり上げてくる。陽子も笑った。

何度かの手紙のやりとりのあと、陽子はサンフランシスコの周一の住むアパートに東京から電話をかけてきて、一週間だけでもいいからとにかく日本に帰ってきてくれと懇願した。母親も自分もさみしいのだという。周一が返答をしおっていると、おとうさんが死にそうなの、と思ひ詰めた陽子の硬質の聲が受話器を通して伝わってきた。その瞬間、周一の脳裏に、口を半ば開けて青白い顔を天井に向けて横たわっている父親の死に際の姿が明瞭に浮かび上がった。

そうか、いよいよ逝くのかと思った。痔の手術後の経過が思わしくなく、心臓が著しく弱っているという。

「関係ないよ」周一はいった。「死に顔を見に日本に帰ったって意味がない」

「でも、帰ってきてよ、帰ってきて」

陽子は甘えた声でくり返した。もう幾日もつか分からないのに、と呟くようにしている。それを聞きながら、国際電話は随分感度がよく出来ているものだと思いは感心していた。

「ほんとね、おにいちゃんにあたしの結婚したいと思っている人に会ってほしいの」

陽子は続けていった。周一の心に灯りが射した。都会の夜のネオンサインや田舎にある川の流れが交差して思い出された。

「お前、結婚するのか」

「うん、でもまだ二年くらい先よ。とりあえず婚約だけするの。だってまだ結婚したくないんだもん。けどさ、あたし、婚約者はほしいんだ」

「帰るよ」

周一は返事をした。クリスマス休暇を利用すれば二週間ほど日本に滞在して、正月二日から始まる授業に間に合うよう戻ってこれる。滞在期間が短かければ、往復の特別割引料金を利用できる。

電話をきったときに、周一の胸の内では、日本に戻ったときのスケジュール表が漠然とでき上がっていた。まず一人で昔よく行った奥多摩の山に登り、母親の田舎に帰って釣を楽しむ、

東京に戻って友人ときかんに飲み回る。奥多摩の川瀬の岩の間に、非常用として米をビニール袋に入れて隠しておいたことも思いだした。まだあるかな、周一はアパートの窓から前に見えるサンフランシスコの下町の建物を眺めながら口の中で呟いていた。

日本に帰る前のひと月ほどの間に、周一は、すでに、父親はこの世にいらなくなってしまったものと決めてしまっていた。何かの折に父親の顔を思い出すことがあっても、それは仏壇の中で、祖父や祖母と並んで置かれている父親の屈託のない若い頃の笑った写真であり、葬式に集まったと思われる叔父や叔母のくすんだ表情などがついでに思い出された。周一の思い描く家の様子は、何もかもすっかり落ちつき、陽子の婚約者となる青年の笑い声なども聞こえてくるような気がしていた。老人のいなくなった陽気な空気の流れる家庭を想像することは、周一にとって極めて自然だった。気持の方で何のためらいも障害もなく、ごく穏やかに父親を成仏させていた。

周一が小学校に入った年に、父親は一度死にかかった。心臓衰弱とされていた。光の乏しい病院の廊下を、周一の知らない顔の親戚の人たちが、何人も影をひくように往復していた。昏睡状態にある父親のベッドの周囲に、母や叔母たちがつぶれた表情をして坐ったり佇んだりしていた。その重苦しい雰囲気は馴染めなくて、周一はみんなに対して耳をひっぱってみたり、赤んべえをしてみたりして一人で愛嬌を振り撒いてみた。誰も相手にしてくれなかった。つまらなくなつて廊下に出ると、そのあとを三歳になったばかりの陽子が、足を縛れさせながら追いかけてきた。

「おとうちゃん、死んじゃうの？」

陽子はあどけない表情で訊いた。周一はそのとき初めて顔をしかめた。

「ねえ、おとうちゃん死んじゃうの？」

陽子の見上げた瞳に、高い天井から吊された電球が映っていた。

「どうしておとうちゃん死んじゃうの？」

瞳にとまった光は素直な輝きをみせていた。周一は首を前に押し出すようにした。軀を起こして妹を見下す。

「生きていても仕方がないからさ」

陽子は唇をすぼめて、不思議そうな顔をした。その時の幼ない陽子の間の抜けた表情を思い出すと、周一はいつの間にかくすくす笑っている自分に気付く。可愛い陽子の顔立ちと共に、ベッドで口を開いて寝ている父親と病室の中にいた親戚の者たちの深刻な表情が、幼ない自分の面影を上にして立体的な思い出を形作る。その小さな世界に向かって笑っていると、きまっと奇妙に爽かな風が頭の中を吹き抜ける。

人ごみの中に父親の顔が浮かんでいた。心持ち前屈みになりながら、蒼い顔を上向けにして近付いてくる。周一の姿をとらえると、眼の奥の方がぼやけて煙った。頬がそげて、顎が尖ってみえる。周一の前まで来て立ち止まり、妻と娘を交互に見比べて、「失敬、待たせた」といった。